

「特集」今年の夏は「も〜」1杯! 牛乳飲んで酪農支援!



逆境の中でもおいしい牛乳生産に取り組む



畜産用飼料(エサ)の高騰と牛乳消費の低迷により、JAふじ伊豆管内の酪農家は大きな影響を受けています。県東部地区の酪農業を守るため、この夏はぜひ牛乳の消費にご協力をお願いします。皆さまにおいしい地元産の牛乳を飲んでいただきたく、今回は管内の酪農業を特集します。

JAふじ伊豆の牛乳生産

JAふじ伊豆管内は県内でも有数の牛乳生産地です。三島函南・伊豆の国・なんすん・御殿場・富士宮地区で牛乳生産が盛ん。JAふじ伊豆の組合員では計39軒の酪農家が各地区で酪農委員会・部会を組織し、厳しい衛生管理のもとに牛乳を生産しています。関東地区1都6県と静岡県、山梨県の酪農関係者で組織する「関東生乳販売農業協同組合連合会」主催の「関東生乳品質改善共励会」では、管内酪農家の生産する牛乳が上位入賞を果たすなど素晴らしい成績を取っています。生産される牛乳は県東部地区の学校給食にも供給され、子どもたちの体づくりや健康を支えています。

頑張ってます! 酪農家

JA静岡経済連の東部地域酪農委員会委員長、JAふじ伊豆富士宮酪農部会会長を務める富士宮市の土井一彦さん(62)が経営する「土井ファーム」でも、飼料高騰などの問題に直面し「限界にきている」と現状を訴えながらも、逆境の中でもおいしい牛乳生産に取り組み、問題解決に奔走しています。土井さんは輸入飼料に頼らない経営を目指し、このほど大型機械を導入。飼料用のトウモロコシ、ライ麦など自給飼料の生産に乗り出しました。土井さんの妻・智子(55)さんは、自家の牛乳でジェラートやミルクパン、堆肥を活用した季節の野菜を販売。JAふじ伊豆管内の牛乳のPRを行います。商品は、当JAファーマーズマーケット「う宮〜な」にも出荷。人気を得ています。土井さんの後継者・良太さん(34)は、就農10年目。妻・まり子さん(35)と2人の子どもを育てながら酪農に携わります。「就農10年目で最大のピンチですが、おいしい牛乳を届けたい」と日々の飼育に力が入ります。

環境負荷軽減に向けて

土井さんはJAふじ伊豆の誕生で、県東部地区での循環型農業の構築ができないか期待を寄せています。「私たち酪農家は、牛乳とともに堆肥も生産しています。御殿場地区などをはじめとした米どころでは、米と稲わらを生産しています。私たちは田んぼの肥料として堆肥を提供し、水稲農家には牛の飼料として稲わらを提供してほしいです。肥料価格も高騰しているため、農家が互いに支え合える体制をJAふじ伊豆に構築してほしいです」と話しました。JAふじ伊豆では、農林水産省が示す「みどりの食料システム戦略」の実践に向けて、循環型農業の実用研究を進めていきます。

どうして飼料価格が高騰? 牛乳消費が低迷?

日本の酪農は飼料を海外からの輸入に頼っています。輸入飼料は現在非常に高値。この高騰は新型コロナウイルス感染症の影響による海上輸送の混乱、原油高によるバイオ燃料の需要増や輸送費の上昇、中国の需要増、円安など複合的要因が影響しています。牛乳消費の低迷は、コロナ禍における業務用・家庭用の牛乳需要の減少が影響。乳牛は生き物です。乳を搾らなければ病気になる、頭数の増減も簡単には行えません。需要増減による牛乳の生産調整は非常に困難です。



自給飼料で乳牛を育てる



土井 一彦さん・智子さん夫妻 (土井ファームにて)



土井 良太さん・まり子さん夫妻



あいら伊豆地区「いで湯っこ市場」で牛乳をPR



富士宮地区「う宮〜な」で牛乳をプレゼントするJA職員



議員に窮状を訴える畜産課職員

6月1日、当JA本店で国会議員と役職員の意見交換会を行いました。JAからは、飼料の高騰、乾牧草の供給不足、乳価の低迷などの酪農家の窮状を説明。管内では直近10年間で38軒の酪農家が廃業している現状を訴えました。議員からは飼料の確保と、牛乳価格の安定に努めたいと酪農・畜産業の救済に取り組む旨の回答を得ました。

【ファーマーズマーケット 16店舗で牛乳をPR】
当JA畜産課とファーマーズ課は、国連が定める「世界牛乳の日」の6月1日と2日の両日、当JAファーマーズマーケット・直売所の16店舗で来店客に地元産牛乳をプレゼントし、牛乳をPRしました。伊東市内からのお客さまは「子どもが給食で毎日牛乳を飲んでいますが、家族みんなで牛乳が大好きです」と笑顔で話していました。

【牛乳消費にご協力を】
各地区で酪農家の皆さまは、厳しい現状の中、高品質な牛乳の提供に努めています。「ふじのくに富士山ミルク」や「丹那牛乳」など地元産牛乳の消費促進にぜひご協力ください。地元産牛乳は、当JAファーマーズマーケット・直売所などで求めください。



遠山由美さんの「も〜」1杯レシピ

牛乳とジャガイモのミルクアイスキャンディー

材料

- 牛乳……………600ml
- ジャガイモ(三島馬鈴薯)……150g
- 砂糖……………50g
- 季節のフルーツ……………各50g程度

※口径6.5cm、高さ8cm程度の紙コップ8個分

ポイント

ジャガイモを入れるとシャリとした食感を出し、溶けにくくなります!

作り方

- ジャガイモの皮をむいて、すりおろし、樹脂加工の鍋に入れる。
- ①に砂糖を加え、ホイッパーでよく混ぜる。砂糖のザラザラ感がなくなったら、牛乳を少しずつ加えて、溶きのぼす。
- 鍋を火にかけ、中火にする。ホイッパーで鍋底をこすりながら、ゆっくり円を描くように混ぜ続ける。濃厚なポータージュースぐらいのトロミになるまで煮詰めたら(10分程度)火を止める。表面に膜がはらないよう「落としラップ」(牛乳表面全体にラップをはりつける)をし、手でふれる程度まで粗熱をとる。
- さっと濡らした紙コップに分け入れる。1cm角程度に切ったフルーツを25gぐらいずつ加え、中心に棒を挿し、冷凍庫で凍らせる。食べる時は、紙コップ上部にハサミで縦に切り込みを入れると、手でクルクルと簡単にむける。

遠山さんの牛乳ワンポイント

カルシウム不足に陥りがちな日本人。牛乳はカルシウムの供給源になるだけでなく、良質なタンパク質等を豊富に含む「準完全栄養食品」です。「準」なのは鉄分とビタミンCが少なめで食物繊維を含まないから。上手な食材合わせで完全化1を目指しましょう。

とよやま ゆみ
遠山 由美 さん

PROFILE
野菜ソムリエ上級プロ、栄養情報担当者、食育プロデューサーなど。食材の魅力を料理や栄養学などを通して紹介。生産者と消費者の架け橋として、テレビやラジオなど多方面で活躍中。

広げよう 地産地消 協同の和 — JAふじ伊豆トピックス

農家繁忙期にJA職員が手伝い



イチゴの株抜きを手伝うJA職員

伊豆太陽地区本部では、自己改革の一環として、JA職員が農家繁忙期に農作業を手伝う「農家支援事業」に取り組んでいます。本年度は4月から活動を開始。5月17日には東伊豆町のイチゴ農家の依頼を受け、職員3人がイチゴの株抜き作業を手伝いました。1年間で職員1人あたり2日間の支援を行っています。

〈伊豆太陽地区〉

地域でウクライナ避難民支援



JAと三島市、地域企業が連携して支援

三島函南地区本部は三島市や地域企業と連携し、ウクライナから同市に避難された家族に食や健康など包括的な支援の取り組みを始めました。6月2日には同地区本部で野菜の贈呈式を開き、当JA藤沼和明常務や生産者が原ガンナさん家族に地元野菜を贈りました。JAは今後も避難者の方に、毎月野菜と米を無償提供していきます。

〈三島函南地区〉

通販強化へ特産品の魅力発信



伊豆の国地区の特産品をPRする鈴木組合長

6月2日、伊豆の国地区本部を会場に全国農協食品(株)主催の「大地会オンライン産地研修会」が開かれ、当JA鈴木正三組合長や職員が地元特産品を全国にPRしました。同地区特産であるイチゴの試食やワサビ井調理実演、ミニトマトのほ場・農産物直売所からの中継など、通販企業や全農・JA、関係会社にウェブで配信。通販事業強化に向け、魅力を発信しました。

〈伊豆の国地区〉

JAが小学校で野菜作り授業



JAが小学校で野菜作り授業

あいら伊豆地区本部営農販売課の営農アドバイザーは5月9日、伊東市立宇佐美小学校を訪れ、2年生の児童52人に夏野菜栽培の授業を行いました。最初に営農アドバイザーがミニトマトやナス、キュウリの育て方を説明し、児童たちは実際に一人ずつ定植を体験しました。収穫を楽しみに、児童たちが水やりなどの管理を続けていきます。

〈あいら伊豆地区〉

女性部「SDGsの日」活動開始



女性部「SDGsの日」活動開始

女性部なんすん地区本部の「えがおの会」は5月19日から「SDGsの日」活動を開始し、沼津市の原支店前でフードドライブの食品・エコキャップ・プラタブを回収しました。食品は社協や地域の福祉施設へ寄贈、エコキャップとプラタブは子ども向けワクチン代、車椅子と交換されます。年16回実施しますので、地域の皆さまのご協力をお待ちしています。

〈なんすん地区〉

レンタル農機活用しサツマ芋移植



レンタル農機活用しサツマ芋移植

御殿場・小山さつまいも加工品生産組合は5月18日から6月上旬にかけて、御殿場地区本部のJAレンタル農機の一つ、サツマ芋自動移植機を活用し、261アールの畑に「紅はるか」の苗7万8,300本を移植しました。同組合と同地区本部は、農業所得の向上と地域ブランド化を目指し、サツマ芋栽培と干し芋、焼き芋の加工品製造に取り組んでいます。

〈御殿場地区〉

産直市×地元作家コラボイベント



富士・富士宮の作家23店が出店しにぎわう

富士地区本部管内の産直市「大淵ふる里村」は5月21日、地元作家とハンドメイドマーケットを同産直市で開きました。地元生産者の農産物販売や工芸品・手作り雑貨、食品など23店が出店。大勢の来店客でにぎわいました。同産直市の望月茂会長は「今後も地域の皆さまに楽しんでもらえるイベントを開いていきたい」と話しました。

〈富士地区〉

市民招き農業体験で特産品PR



家族で協力してサツマイモ苗を植える参加者

富士宮地区本部営農販売課は農の魅力を広めようと、富士宮市民を対象にさまざまな食農体験を開いています。本年度は4月にトウモロコシの種まき、5月に田植えを実施。6月5日には家族21組が参加し、JA職員に教わりながら落花生の種まきとサツマイモの定植を体験しました。参加者は随時栽培管理し、収穫までを体験していきます。

〈富士宮地区〉